て飛きしめ

へ 5
6530

芭蕉清滝寺於て庵[illegible]追善集
[illegible]見人[illegible]覧、我の作[illegible]披露[illegible]

六月

如し[illegible]

社中

水[illegible]河[illegible]鮎や [illegible]楓　錦堂

光明山

[illegible]山は大星[illegible]や五月雨、　木潤

[illegible]や[illegible]　古心

花[illegible]人[illegible]向　古心

[illegible]　甘石

[illegible]　冬秀

[illegible]や青[illegible]　古秀

[illegible]　三蓑

[illegible]浦、

[illegible]

東京仲佐賀町
小築庵春湖
西京東山双林寺前
芭蕉堂良大
大坂今橋町二丁目
五木庵潮水
遠江見附驛
前嶋嶼一

尾陽雲林院文庫

夫日本の国は[illegible]
[illegible]の進退[illegible]人と[illegible]大[illegible]
[illegible]国[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]国[illegible]

松井藏書

へ5
6530

0/0/86021652

[illegible]

急かりし寒をわすれて其年より
大徳志ある者も其筆をよせて投
書しる人となる程に其筆を取る
僅に世のさまを伝ふ事ならし

辛未六月　蕪史

［朱印］

追善之俳諧

蔓山居士

手枕や思ひ出ふる月を友　尾正
荻すゝきよしや風の行方荻　蕪史
寒き夜くらし蓬も咲やらん　古心
とり附鏡や旅路を仕舞ふ之　舒堂
今や絵の原でも暑き秋渡るなく　甘谷
静かにも汁の煙秋深むる

ハ雪且ゝ何ともてさらく舟の音　三癸
置ハ忍ていも土墨ハ松葉の子　古青
搗かんとむしたる伸て餅の湯末　京湍
さらく迎来しと志めたる世ゝ　冬青
乗りより絹て味方ハ始めりた堂　午海
搦除さ流と要てとしこ維の河る　可童
解き絡て篠の月の勒まし　木潤
新酒よしてハ清よ色る醉　庶文

やまらのて貢儀の袖ゝて　枚石
双ゝとふ徐て すらふ汲立　秀嶺
花のかの梢とて深く隔きもし　春樹
春の月よりの静か成る音　桂影

右一順

明治三年九月五日三回忌取越
法莚安間村梓普傳院與行

秩父摩阿彦は予が郷里連なりしより
四とせさる紙は清水巳巳は年正月十九日
黄泉に赴き給ひしことは我もて一つひは
難くてしいはあてしいは歎しこころ残るてしは
小篆字には書きのりて猶は書おく
わいその勇納を書おり其合なきは

秩父ねも向は霧や夏の後　奕史

香語は此秩父へ詞達阿も
秩父の蕃は事なきは寄の略す

宴終りし其後月はあらし哉　素純

秋ぞ自分に寺付鐘を聞けり　三葵

萩がもとつめにたえぬ秋の終哉　舒堂

塚の秋尽よしとても吹く秋り　木潤

立帰る塚の秋何ぞ杉の雨　古心

立よる迄ハ蓑も濡れけりや塚の露　古秀

月影にみおくり起りや萩の露　村治

折々のふるきを独りまゐりや秋の野分　冬秀

其塚をまたたくまつりや花芒　西臺

手向ぬれば蓑袖ハ袖よりも芒の露　棲鷺

秋の世の眠りをさめる折り一夜明り　尾正

時に居士の蕉友或ハ門人及諸子より
寄来りし追悼の言数多有しかとも猶
傍ら附又折々来りし句を集め吊号
詞書を略し真に唯発句のみを
抜きとるものなれ

春部

掃庭に落葉よ松葉よ千代の春　素山

すら〳〵と出る新涼や初の礼　九成

初日出てしの吉方ハ鬼も角も　吟秀

庭掃や去年の落葉も昨の春　園女

初の千枝は花祝くを明けり　不月

汲みて見ハ水まてかゝる初手水　雪萍

根ひきにさそハれ行の初霞哉　義岳

出かはりの猿もこもれし子の日哉　宇尺

かゝてにはつ寺禅寒し初霞　三楓

入津まて萩梅白ふかし千鳥哉　松庵

若草千代に遠くまて行すゑの春　枚谷

霞まて行くなる白ハ春し清作　竹芝

山畑や耕しかけしと梅の花　桐林

似たものや梅もまつ折られし咲のみ　尾正

梅か香や炭俵にまつかはる哉　謙丘

あら梅や一坊ハ白炭にまする文　三巻

紅梅ぬ気のつかひぬ墨浦　黎丈

大粒那雨降ましる梅の那　淅風

海ぬしのくさにしるし梅の花　洋々

松ぬ梅次第なり清事なり　乙喜

日の脚尽て日は入るゝ松の風　中雲

赤椿に雨はれて鳴く蒼　李山

淡き月生れたりけり之春の雪　素汀

本代伐て捨松くく山や春の雪　史山

淡雪や数にハ如くと新草鞋　（尾張）素水

松陰を出や手まで雲霧水　暮風

まてとし出居通る雲霧の風　其緑

雪と見や白根は雲も夜月和　柏葉

鶯かとよ逃八重のむらさきに　芦舎

ころ手と柳の縁きあや窓の壁　有呂

蕨や屋ゝく柳はし峰の後　玉池

鶯や羽よ一雪洗ふて梢かな　見外

淡くあし未来鶯宿や柳か手　宇山

ここ碍ずや酒は屋根庭を通如け　菜也

鶯やよき来合せて菓の餌　昌山

鶯終に人やとまで始て七百手鳥　松塢

やましみのあいの雉子飛り二三羽　碧気

袖すれて鳴る雉子や舟上り　古考

明けのてらしたる寸来の雪　良可

青にうけ二日降しいて初雪雀　介居

芽外けれ来て線雪の雪荘哉　東和

朝月けまた消る浦け餘寒哉　連梅

人中へ待出て出るや春の水　燦庵

豆八ちまいのよいて春の雨　桐窓

春風や松けの中も波の話　了識

寸女代も雉音や天文ゝ耳　陶牛

山燒やかたたゝかけ看とる　甘谷

春の年やこゝ継承のすり少海雲　一鳥

月け出もまやいゐ春け寸る涅槃哉　梢谷

夜けけ降まりしまつてい飛け朧月　雪渓

松山の春の飛立の中朧月　有我

鳴蛙は水鶏里も暮る也　巴大

蝶の飛ふのうきやりうの揺し之　古人　景渚

我の子は人形立居に華哉　良大

積葉も花の滅してちる桜　南豁

宝津に雅の宿にて

神垣や出てゝ宝殿和らる　硯水

春霞きるや桜の影日和　嵐牛

夕暮や立出花残る花桜　一雄

吉野

みわたせは山順ちて桜花　他山

音たてゝ流るゝ川や花盛り　禾堂

浮鯛や磯より波の花盛り　春水

客さくしき家からの席や花の雨　思楽

小篠原

咲桜みきくゝしちの川端　義兄

やまかせに尺まてもれぬ峯の玉　流霞
山蜂はすこし静まり寸花盛り　蓑石
時折くもる萩まの笑ひり花の庭　春耕
花見や鉢もく起しに手水　貞人　通志
代まりたき六寸とまりや雛節句　積翠
苗しるや水は加減はかりつる　未潤
時にもらひ人まかせなや茶摘唄　弘美

永き日り咲あまりけり菜種の花　雲溪
挽て尺て蕗りの抄わすれし菜の花　乙瓢
字のなんぞに晴て有てもの若葉　如白
垣越しに桃咲しも妻の惜まいる　為山

安部

巣翔れ静しハれ守青嵐　白水

すゞ初て四五日まへの須青嵐　桂女

初夜れ冬をと鈔見て蝉の丸　兆音

降雨ゝえおろ花須摩の菫子花　黙平

猪牙れ汝まりれ里菫子花　西黄

日去をすけりし一露ちらし桃花れ　恭眠

芍薬や露孫れゆふ庭ハ赤ぬ花　羽洲

工ゝ移せく庭れ古りや昔の花　清良

下枝くとくの取風や秀楓　果実

咲もしまあし小鳥きへて子規　穏変

花れ車挽ゆひの一の菊葉れ　蒋池

東寧府

蘇ハ毛し花有まいら夜生發　雲香

くゝさらく文風わせ文去や梅の更　菜蝌

物のすくなき秋の音や子規　桂影

猿引にとる秋の庭に須杜宇　東枝

露秋萩の枝にしたがへるおもき哉　此一

吐出してすむ音の友川や流るる清　宕心

こゝ清くも秋のさひしや時雨　釜露

青山の秋なくなくたよりまさる哉　等栽

日光にて秋来寺

秋興のゝ顔も白ふ日影哉　完鷗

みしかの夜秋も月に不知也三笠山　杜水

稲葉より拍子の中や雁の礎く秋　尺波

明るまで萩の味ひや寸まし汁　逸外

山風の添まゝ寄せて吹きたる秋の花　竹二

稽く歴秋の風に咲く葉未成　知恭

風の音に浮ぶ哉秋の花　蝸堂

水鶏啼くや方丈までも宵の霧　連水

雛やむかし何のあし哉の笛の礼　朴隠

蘿の風もし吹わたる流の笛の秋　兆左

さみたれや栗流る家のこすゝれ　釣月

さみたれ野のしもや山の名かり
　袋井の跡をたつ　雅六

さゝ流の晴夜や付る七森　古心

入梅晴の滴りハ只る乳川　潮水

江戸ハ只半流くもる志ゆく礼　梅程

志ゆく螢もうとし加ゝ千ゝ行　文佐

ちや水文流の世ゝとは流伺の色哉　立意

立ち迷ハ峰の出る何ち蘿礼　李旋

切かね切凡の臭や蘆とし　無角

夕顔や青葉のうち白扇　綾雲

帷子かり吹よ風や川手水　佳木

夜山の猿やさゝめて水走　芝積

水すゝくりしまふ鳴りそ夜の月　乙也

夜の萩やさえて眠りし月を待つる　子紹

鴨の巣の浮くてそらの金音の渊　金石

瀧おちて叶へ山ちる世継の声　友昇

探りかゝや讃めきこえて茸の露　壮山

暑き日や是はと残して渉午后　卓志

身に何も寄るもの八嘆よ川納涼　淞山

庵の秋の浅きもよ手ま門納涼　青宜

来りて来し あしや鳴は向河岸　風芋

慕はれゆきの世やかさの去りぬる　栗欣

とし加ゝゑ河ゝのさ暮れて山開波　菜旗

秋きて野の花と影の猿木槿垣　素朗

秋部

稲入して秋に庭安や[illegible]の秋　蓬宇

ころびすも涼しさやそれぞの秋　酔雨

来る秋のおしむ秋気やさみ大根　梅年

眼尺して秋ハ来るらし八百屋店　草居

ちる秋やむこうさきそし風の味　文昇

笹秋竹秋風に絶ゆや下秋川　捨山

立寄る又口の秋て雨や僧少納　芳泉

寄市秋さそふや根にの露の庭　素庭

秋韶いさみ人気のし花やし文　昇支

すゝ道に何とわのりんど萩のうれ水　有終

秋うる人秋まつりも印しめ印花　旭扇

夕暮や色ゆのよし又萩の露　茂精

吹風て露こ秋花野の風　五渡

まうこ青丈稲ゆりきてやむくら雀　一樹

八朔やすゞの里は何の風情　ちよ丸

気のまゝや中の一入も秋の暮　禾雄

帰るさの窓へ吹く也露ちらし　梅休

名残は沢瀉や坂本の一夜　草園

最面白き晴能も来て松の中　素陽

月あらて尽須磨の空二百月　正仍

八朔は晴てまたかて二日月　子郁

松江

まだ仰ぐ三顧は低し二百の月　曲川

まつ松を翁かや宵の月　見之

待宵や夜は中々月の空　龍波

出船をまて松と開の空の月　翠兄

立待や月しるよき竹格子　露牛

和田岬

笠の前を秋の何ら浦の月　其隣

月夜ね併花さし葉末に照すまて　遠江　旭扇

更しさましても人ハ我し月の夜　言之

人さきはさて須磨山をかぞる

淋しかる月を山路の雲間かれ　醒花

晴曇り後り浮かり松生の月　九起

おもひ出す明るき何らし山の葉　可轉

草笛やちやく出初る桶えひ　三水

切岸の波に砕くる波の月　木圭

板の間へ影こ洩るる竹の月　雲帰

深川へきらりて和歌の浦の月　東湖

西行谷

浮世くるまみ迷ふ庵の瀧の音　栗樵

日あへ雲見て一樹の紅葉かれ　淡甫

冬部

初冬や秋まつ〻取る残る山　麻丘

梅も葉も散りて秋夜々小春哉　采藻

豆花秋濃の小春や鐘山寺　十洲

明けて千の森も如くや初時雨　雲洲

松風を降しつめ夜の時雨哉　塘雨

紅葉ちりて明けても秋の寺世に枯れけり　波文

明けても秋とれど終ふや夕時雨　淡節

木の葉散る小田の秋原やや菜荘　明鶴

秋葉や一塵立てて秋の終る哉　松里

高嶋の秋好の取る都や神の留守　市猿

市の立日と何事生海鼠売る男　生桂

浜風や山の秋そこて夕千鳥　綺石

穂の根子秋まだしや明の旅寝哉　守窓

寒さまて蕎ひ出すの大根畑　潮風

手繰ひ抜穿柄にひき付大根川　士芳

ぬめりてはまるや様の散る葉　杜堂

さし出ぬ片秋はまるや枇杷の花　堯年

つまらぬ秋さまて手みらり冬枯　糸嚢

古株秋ねきて水仮咲くなり　漁藤

冬仙や冬木に居りし丹秋渚　舒堂

木からしや秋まて蕎る崖の松　知碩

沖角秋杉青こと寒さの郷　雪貢

此風は戻すまれて冬の月　静斐

朝夕ハ蒔えよきて冬を乳　画村

日ら庭秋入ることと出来し冬至化　太年

小山秋さしまえて秋や蕎麦　一試

水に秋ハ覚なりけり庭の秋　似水

静まりし山まさへも落る日の入　江春

萱くれて蛍火明りや雲の上　琴堂

門口も桶まで淀りて雲の里　其然

山ハ雲秋雅く船ひや新秋風　芳志

稲さゆりまつりぬるゝや雲の義　在雯

晴まして二種て天て秋の浮雲　此良

わりのまり枝に雲まの上　鶴枝

針さ秋の羽織着て出んとし忘　竹兔

大くし秋萩ハ乏ろよまて行燈哉　三外

年内立春

橋ともしさや栗餅やとしの内　士喬

富田藏書

明治四